

和歌森太郎

酒が語る日本史



酒が語る日本史

和歌森太郎

河出書房新社



酒が語る日本史

著者 和歌森 太郎

発行者 中島 隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

印刷・晧印刷 製本・大口製本

昭和四十六年六月五月初版一刷発行
昭和四十六年十二月初版六刷発行

定価 七五〇円

落丁本・見丁本はお取替えいたしません。



0021-087102-0961

© 1971

はじめに

我が田に水を引くようなことを言わせてもらおうと、しばしば「酒は気違い水」だといわれるけれども、そんなものではない。むしろ、現代のように、国際的にも、国内的にも、種々の意味での狂気がきわだっている世の中にあつて、これを鎮めさせ、お互いの人間を取りもどさせるのに有効な飲みものだと言つてよからう。

どこでもかしこでも、ぎすぎすした、とげとげしさが目に余る今、たかぶる神経を抑え、人間としての交わりを滑らかにする上で、酒のききめは無視しがたくなつてゐると思う。

もともと、酒は、個人が独酌でたのしむようなものではなかつた。複数の人間が相寄つて一つ酒を分かち飲むべきものだった。古くは、祭儀や行事を共同で行なう機会に、酒を酌みかわしつつ、共同の興奮を味わうためのものだった。それが、仲間の人間関係をいっそう強めもし、更新もさせることになつた。したがつて、神信仰に格別情熱をいだかなくなつた後世まで、人は「おみき」をだしにして寄合ひ酒を好んで飲んだし、今日でも「一杯つきあえよ」という言い方で、友だちとしての仲を暖めようとする傾向がある。一人晩酌をたしなむ、あるいは飲み屋に入つてもカウンターに肘をついてチビチビやりながら、黙々と飲むものが、今日はふえてゐるには違ひないけれども、なお共同の酒宴をたのしもうとする要求も、なかなかである。そういう中で、乱痴気さわぎを演じ、バカを通り越して狂うものもいるし、私などもその

一人かもしれない。しかし、それでも酒を気遣い水だとは思わない。はたのものから軽蔑され、笑われていても、他人に実害を与える迷惑をかけぬ限りは、よいではないかと思う。だから、それで心中に迷惑をおぼえる人が、一人でもその座中に居るなと思えば、そんな「乱」を演じはしない。場所柄を心得て盃を手にする。もっとも、そう心得ることは、ほんとうに酒を飲むことの効果をあげられないことではある。つまり生身の人間をさらけ出しあう媒介が酒だと考えるとき、それを阻むのでは、酒を酒らしく飲めないことになるからである。

小は個人同士のつきあいから、大は国相互の交際に至るまで、現代はじつに多くのゆがみや偏りを感じさせる。それぞれ非常に強く己れの個に執心している。それはそれで人間の進歩のためには、たいせつな側面だから、一概に否定するわけではないが、どうも度ぎつさが気になる。皆がお互いの神経を麻痺させるよう、運動でも起したくなりさえする。その意味で、酒をすすめあう運動だつてあつてよいくらいに思う。

昨年夏、ソ連に息子とともに旅行したさい、モスクワで科学アカデミーのトペハ氏の私宅に二人とも招かれた。明治以来の日本の労働運動史の研究者として、すぐれた業績をあげているこの歴史家と、私は、歴史の専攻領域も、史観もだいぶ隔たっていることを、互いに承知はしている仲である。しかし、以前に彼が日本に来たときに、日本学会会議側の接待役を仰せつかった関係で、拙宅にも来てもらったことがあつたし、去年のソ連旅行にも、何かとめんどうをかけたのである。しかしそれだけだったら、この学者の人格や、また彼を通しての、ウクライナ民族の手柄をよく知ることができずにすんだと思う。一夕、トペ

ハ氏の有難い招待で、そのアパートを訪ね、夫人たちと相会した中で、ともどもに、ウオツカやワインを飲みつつの食事をして、夜の更けるのを忘れたときの感興は忘れがたい印象となっている。夫人が文字通り底無しにウオツカに強く、よくうたい、よく飲む、まことに愉快きわまる女性だったから、こちらも気がはずみ、たのしさの余り、五木の子守唄だったか何かを二三踊ってみせたりした。トベハ家としてもだいぶ感銘したらしく、よろこびのあふれる面持ちだった。名残りを惜しまれつつ辞したが、帰国後も、この晩のことにふれた手紙をもらったりしている。

トベハ夫人は、日本語はもとより、英語もわからない夫人だが、これだけうちとけられたのは、まったく酒のとりもちだった。思想に隔たりを感じさせる人間は、とかく人間そのものも偏屈であるかのように思わせがちだけれど、案外そうでもないことは、国内であちこち旅をしているあいだにも、酒を通じてたびたび体験している。それにしても、このときほど、人間の一様性、共通性に思いをいたさせられたことは少ない。酒を飲みながら、なお一種のポーズをとる気取りがあってはならないのだということも、そのとき感じたことである。

酒と人間とについて、そんなことを考えている私に、日本の昔からの呑ん兵衛を搜索して、それぞれの人間や酒を窓口にして、各時代の様相、歴史像を描いてくれと依頼してきたのは、佐々木久子さんが編集していたころの雑誌『酒』であった。気軽にうけとめてみたものの、なかなかまとまった文献は無い。酒を産業史の上で扱った論著は、学問的成果として出てもあるが、呑ん兵衛を追跡したようなものは無い。史料的にも、人それぞれの飲みっぷりまで記録したものは多くない。それで意外に手間がかかったけれど

も、『酒』の方々にはげまされつつ、一応二か年にわたる連載を通じて、酒が語る日本史らしいものをまとめることができた。これを主体にして、若干補訂したのが本書である。

史上に有名な人物で、空で想像していたときには、あいつは相当に飲んだに違いないと見て、けんとうをつけ史料にあたってみても、どうもそれらしいところが無い。逆に意外な人物が酒豪だったりしている。そういうことがしばしばあった。概して、反骨のものか、学者、芸術家、知識人の類に呑ん兵衛が多かったようである。ふだん孤独感が強いあまり、友を求めて飲み、親愛の情を深め合う、そうした傾向が、この類のものには多かったし、比較的に自由な時間をもてたということもあずかっている。

そのほか、これを調べているうちに、気づかれることが多いものあり、たんに道楽仕事でもなくすんだ。酒好きの人に読んでもらうだけでなく、酒をにがしく思っている方々にも、酒のもつ社会的、文化的意義を察していただけるように願っている。

一九七一年三月

和歌森 太郎

目次

一、酒の原始的意味……………13

荒神調伏の酒 協同連帯のために 接客の酒と女

二、古代貴人の酒、民衆の酒……………22

酒で不覚をとる 酒に淫して 糟湯酒をすする 平城の大宮
人と酒 宴会の酒 謀議の酒 酒は飲みたし酒は無し

三、酒で人生達観の大伴旅人……………37

ニヒルな酒呑み、旅人 旅人の立場 大宰帥の憂愁 長屋王
の変と旅人 酒壺になりたい 酒こそ絶対の宝

四、酒宴好きの宮廷人……………49

百姓禁酒令 酒癖の悪かった藤原仲成 天皇に酒を供して出世
群飲の禁 菅原道真の酒 亭子院の鬮酒 呑ん兵衛の登場

平安初期の酒呑み 菅原道真の謙遜

五、平安公卿の酒……………70

平安京人の酒 「望月」の酒 プレイボーイ兼家の女と酒 酔
いどれ、中の関白道隆 死んでも飲みたい 陽気な飲みっぷり

六、強い酒で人をつかむ……………84

『宇津保物語』と酒 大盃十盃でケロリ 酒呑み、院の近臣
頼長、菊酒を飲まず 鳥羽法皇・頼長、叡山で酒飲む

七、源平武将と酒……………98

酒盛り中襲わる 酒から破滅へ 下戸の頼政・重盛、末期の酒
源頼朝の酒 椀飯と御家人の酒

八、名執権と酒……………110

和田義盛、酒盛りを襲う 禁酒しきれぬ泰時 二日酔いの実朝
と茶 鎌倉の飲み屋で喧嘩 時頼、酒売りを禁制

九、鎌倉末期の酒……………122

酒の肴に相撲を 鬪犬を見て酒盛り 酔いつぶれた高時の悪夢
無礼講の酒と女 「最後」の酒盛り

一〇、酒の浸みこむ室町幕府……………134

茶会と称する酒宴 酒色に親しむバサラ大名 義満と酒盛りの
作法 義満から義持へ 酒でふらつく將軍家

一一、動乱期の酒びたり……………146

土一揆をよそに酒盛り 勤めの服も酒手に やけ酒で身をほろ
ぼす 一休と酒色 酒豪、三条西実隆 寄合文化の中で

一二、公家サロンで酔う……………158

大乱を前の酒盛り 焦土の傍らの酒 宮廷サロンの酒 禁裏
につどう人びと 公武のあいだでは

一三、山科言継ときつぐの交友と酒……………170

戦国の公家 山科言継と織田氏 酒に酔う公家女性 言継の
社交圏 言継と今川義元

一四、戦国大名と酒……………182

振舞い酒はおごれ 大酒の禁制 酒好きのキリシタン大名
謙信と宇佐美定行

一五、信長と秀吉の酒……………194

首を肴に酒盛り 相撲取りから家来を 酒豪の信長、下戸の光
秀 秀吉たちと酒

一六、近世黎明期の酒……………205

家康と酒 酒に溺れた若大名 梅若寺の呑ん兵衛坊主 後光
明天皇の大酒 酒の需要増と庶民

一七、元禄太平の酒……………217

慶安太平記 酒徳院醉翁 貧乏学者の酒呑み 赤穂義士と酒
汲めども尽きぬ酒瓶

一八、さまざまの酒狂い……………229

元禄酒 警察政治下の酒 酒乱の妄想家天一坊 黄門以来の
酒豪 風流の酒豪

一九、田沼時代デカダンの酒……………241

役人武士への饗応 町人の酒遊び 酔中狂歌師 蜀山人と平
賀源内

二〇、酒に徹する奇人たち……………253

ぶんぶ夜も寝られず 酔漢の元締、内田頑石 粹人酒仙、亀田
鵬斎 大御所時代と酒豪 大酒の会 深まる外庄の中で

二一、維新胎動期の酒呑み……………266

劍菱を愛した頼山陽 山陽の自尊心 中山信名と南山 維新
の志士の酒と女 酒豪、藤田東湖 長州のシンパ、橋本大路
好漢、坂本竜馬

一一一、維新貴公子の飲みっぷり……………278

孝明天皇から岩倉具視へ 明治天皇のコップ酒 三条実美と西
園寺公望 バリでの風流公子 「お寺さん」の待合遊び

一一三、酒につれての国づくり……………290

談論風発、博文の酒 女に一線画す 西郷従道、樺山資紀
乃木將軍と桂太郎 粹人酔客

一一四、近代を開いた酒呑みたち……………302

女郎屋で廃娼論? 酒仙の大学者 超俗奇癖の酒豪 酒豪力
士の雄 太刀山と駒ヶ嶽

摺筆のことば……………313

酒が語る日本史

一、酒の原始的意味

荒神調

伏の酒

ボルネオ、スマトラ方面にいるオランウータンを、土人が捕えるときのことを岡田章雄教授から聞いた。樹木の上にいるオランウータンをまず地上に誘いだすために、木の下に初めは水桶を用意しておく。

するとオランウータンは、この水を飲みに来て、あとまた樹の上にあがっていく。これを二、三度くりかえした後に、水桶に少しずつ酒をまぜておく。何度めかには、まったくの酒桶になってしまう。

オランウータンは、ただの水から、おいしい水へ、そして酒へと、自然のうちにうまい飲みものを味わっていくにつれ、すっかりよい気持になって、酔っぱらってしまう。そして真っ赤になってしまふ。こうして酔っぱらわせてから捕えるのだという。オランウータンが、日本で狸しんじやう々といわれるゆえんはそこにあるとのこと。

もちろん、誰かがつくり出した話で、赤い体毛の類人猿のいわれを伝えるにすぎまい。しかし酒というものを、原始人が、おそろしいもの、捕えにくいものを、捕獲する手段に用いたのではないかと考えさせる話である。

酒は人類の歴史とともに、とくに農耕文化の歴史とともに古いものである。穀物や果実を、食料として

こっそり貯蔵しているうちに、その自然発酵をおこしたのに触れて、人びとは酒というものに気づいた。

日本でも、今から二千年ほど前、稲作農耕を中心にする弥生文化が進展するにつれて、酒というものを知り、これを積極的につくり出すようになったものであろう。米を口にいられて、カミ(嚙)カミしながら、カモ(醸)し出すに至ったものであろう。酒がうまく、しかも陶酔境にひきいれるものであることを経験した黎明期古代の日本人は、おそるべき魔ものや、人生に災厄をもたらす荒ぶるものを、捕えたり、鎮めたりするのにも、酒をすすめ飲ませることを思いついたのではあるまいか。オランウータンを捕えるボルネオ、スマトラ人のように。

酒が、ほんらいお神酒みきから始まるということは、今では常識である。超人的な威力を具えたものを、小さい神と称してきて、古代の人びとはこれを恐れるとともに、その克服に努めた。おそろしい神をも鎮めきって、人間の側にひきよせ、親しく交わりさえもてるようにするならば、人生は幸福である。そのためには、荒ぶる神に酒を供えまつることが考えられた。

日本人にとって、神には荒ぶる神と、平和な幸福を保障するニギミタマの神との二通りがあったとされる。しかし、人間が最初に意識したものは、災厄をもたらすおそろしいものとしての神であった。不運、不幸感がさきにあつてから、幸運、幸福感をしみじみ味わたるものなのである。したがって、神にしても、荒ぶる神の方が、和やかに親愛される神よりも、さきだつて意識されたであらう。やがて荒ぶる神をおさえつつこれを転じて、ニギミタマの神とする、というようなことにもなり、畏怖される荒神と、崇敬される和神と、二様に神々が観念されるようになる。しかしはじめは、神はすべて荒神性をもつたもので、